

第87回 山口西田読書会

前回（2015. 8. 8）の内容は、概略、次の通り。

出席者： 佐野、岡田、桑原、藤村、谷、橋本、山本、千葉

[ I ] 第1編「純粹経験」2章「思惟」9（最終）段落から、3章「意志」3段落の途中まで読む。

1. 第1編「純粹経験」2章「思惟」

第9（最終）段落：**思惟と純粹経験の差異は相対的。**

純粹経験と思惟に関するまとめの（結論的な）段落である。思惟と経験とは同一であり、その差異は相対的なものであって絶対的ではない。

思惟は個人的経験であって、時間、空間、個人を知る（以上である）純粹経験の特殊な一小範囲に過ぎない。（個人と個体の違い？ 8段落までは個体）

2. 第1編「純粹経験」3章「意志」

この章は、純粹経験の立脚地から意志の性質を論じて、知と意との関係を明らかにすることを目的にしている。

第1段落：**意志は精神現象。**

意志は動作を伴うことが多いが、動作は外界の事情で起こらないこともあるから、動作がなかったからといって意志がなかったということにはならない。意志は精神現象であって、外界の動作とは別物。意志には内面的、外面的の区別はない。

第2段落：**意志、その目的は。**

意志は何か特別の力があるように思われるが、実は或ることに對して注意を向けることに過ぎない。一つの心像から別の心像に移る推移の経験といえる。

同一表象（知覚的な外的対象像、例えば目の前の自然現象）であっても、それが属する体系によっては単なる知識的对象に過ぎないが、自己の運動と聯想された時にはじめて意志の目的ともなる。たとえば水は、山から流れてくるものとしてみれば知識対象に過ぎないが、飲みたいものとしてみれば意志の目的となる。いかなるものも、この聯想が成り立たない場合（すなわち、自己運動の表象の系統に入っていない場合）は意志の目的にはなり得ない。天の星は手の届かない存在で、意志の目的にはなり得ない、いわゆる崇高な存在である。

第3段落：**運動表象の体系と知識表象の体系の差異。**

意識発達のはじめでは両者の区別はない。意識は本能的動作に沿って発生し、原始的状态では、知覚的よりむしろ衝動的。経験を積むにしたがって、種々の聯想が生まれ、知覚中枢を本とするものと、自己運動中枢を本とするものとの、両種の体系が生まれる。

しかし、両体系は別種のものとなるのではない。純知識にはどこか実践的の意味があり、純意志であってもなんらかの知識に基づいている。具象的精神現象は必ず両方面を備えている。知識と意志は、同一現象をその著しき方面に由って区別したのに過ぎない。つまり知覚は一種の衝動的意志、意志は一種の想起である（見ようとしなくても見てしまう）。

さらに、記憶表象の純知識的なるものも、多少の実践的意味をもっていることがある。これに反して、偶然に起こるように思われる意志でも、何らかの刺激に基づいている。

[II] 前回のプロトコール（藤村氏）が問いかけた「時間、空間は実在するか」という問題について議論があった。

時間、空間は物の性質（実在の形式）なのか、認識（整理）のための形式なのかという問題である（佐野先生）が、西田の考えには「直観の形式として人間にアプリアリに備わっている、経験整理のための形式である」というカントに近いものがある。

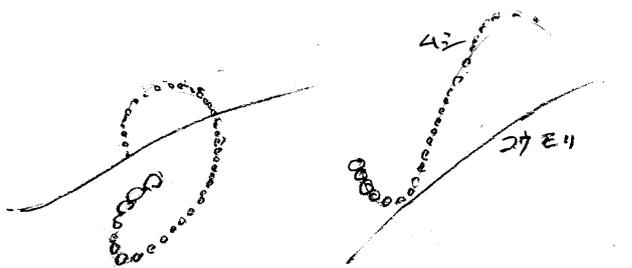
西田の考え方を受け入れる事例として「酔っ払うと時間、空間がわからなくなる」「時間を忘れてボーとしているとき、時間は消えている」などが挙げられたが、これに対する反論もあった。

反論は「時間はもともと（どんなときにも）存在していて、それをどう感じるかが問題」ということのようにであった。これに対して、「それではビッグバンをどう思うか」「酔っ払いと正気人の比較は第3者が行っているもの」などの質問や批判的意見があった。

これらのほかに、自然科学時間論も話題になった。



ヨッパライ



コウモリの捕食行動

(文責：千葉喜彦)